

かけた。

そのとき、近藤は提げてゐた太刀で、びんと打ち拂つた、と、中岡の劍は、ぼきり
鋸折をしてしまつた、あつと、中岡が驚いて、脇差へ手をかけたとき、さつと肩口へ
切りつけられて、ぱたりのめつた。

十郎太は、必死となつて戦つて、廊下へ追ひ出た、と、一人の隊士が、さつと斬り
込んだ、ぱちり受けとめる間もなく、さつと横に一人が斬り込んで来た。

『えつ』と、逸見は後へ飛んだ、手欄に足をとられて、づどん、ころく、どんと下
へ落ちた。

『はつ／＼／＼』といふ、笑ひ聲が階上におこつた。

近藤は得意満面、上機嫌であつた。

(悪霊恨みをなすとも、そも、なにごとのあるべきぞ、悪逆無道のそのつもり、神明
佛陀の冥感に背き、天命に沈みし平家の一類、主上をはじめ奉り、一門月卿雲霞のご
とく、浪に浮びて見えたるぞや)



(3) 巷の闘亂

近藤はとん／＼と足を踏んで、先きにたつて、廊下へ出た。

(そも／＼これは、桓武天皇の九代の後胤平の知盛の幽霊なり、あらめづらしや、いかに義経、思ひもよらぬ浦浪の、聲をしるべに出舟／＼の、知盛が沈みし其の有様に又義経をも海に沈めんと、ゆふ波に浮べる長刀取りなほし巴波の紋あたりを拂ひ、潮を蹴立て、あく風を吹きかけ、眼もくらみ、心も亂れて、前後を忘るばかりなり) 近藤は足拍子をととり、はた／＼と柄頭をた／＼へて、船辨慶を謠ひながら、悠々と、新選組の一隊を引きつれて立ちさつたのである。

不覺にも料亭から、轉がり落ちた十郎太は、足をくじいて、よろ／＼とよろめいた。心は矢竹にはやるけれども、どうすることも出来ない、このうへは、身をまつとうするほかない、十郎太は、よろめきながら、路次へ入つた。

『おや、先生ぢやおまへんか』

かういつて聲をかけたのは、誓願寺の、舳綱の文太であつた。

「お、文太か、残念ぢや」

「え、ッ、どうなすつたのや」

「坂本どのは、殺られた、身どもは、ふかくにも、轉がりおちて、このしまつぢや」

「なんどすつて、坂本さまが、へいッ、やつぱり、新選組のやつらどずかえ」

「うむ残念だ」

「あつ、出で來やがった、先生ッ」

舳綱の文太は、やにはに、十郎太の手をとると、うんと背に乗せて、下駄を脱ぎすて、跣足になつて、とんくと逃げさつた。

ゆくては、龍巻の宅。

語るものは悲憤の涙、聞くものは悲歎にくれた。

「やつぱり、しらせであつたわいな、龍馬さまの、いまのさき、出足に落ちた水仙の花、え、さうと知れたら、なんとしても、やりはせんものを、心のこりや〜」
といつて、お柳は涙にくれた。

「とはいへ、お柳どの、いまは、なげいたとて、かへらぬこと、身を國事に殉ずるのは國士の本懐、悲しさはつきぬとも、あきらめたがよい、それにのう、あ、このやうに、凶事さへなかつたら、いかに龍馬どの、嬉しい顔を見するであつたらう、お柳どの、今日はのう、龍馬どのが、身を賭しての大畫策、幕府も、とう〜大政奉還することに内定し、近くに、天朝の御代にならうといふ、心の躍る喜びの消息に、龍馬どのもおいものう、空の晴れた心地で、喜び合ふてゐる、さなか、憎い新選組が兇刃を振つて、太刀抜くひまもなく、龍馬どの討たれた、残念だ、だが、龍馬どの、宿志の成功を知つて死なれたは、せめてものこと、まこと、坂本氏は死んでも、その功業は、末代に生きる、末代に生きる」

十郎太は、はらく〜と涙をながした。

「お、それでは龍馬さまは、思ひのとほつたことを知つてかえな」

「うむ、さうぢや」

「せめても、嬉しいら」

お柳は顔を伏せて泣いた。

いつまでも泣いた。

その夜、お柳のつや／＼しい黒髪は、ぶつつりと根本から切られた。

戀の十郎太

坂本の斃れた年、慶應三年、將軍慶喜公は時勢を察し、大政奉還を斷行したのであつた。

それには後藤象次郎、勝安房守なんぞ、表面の力として現れてあるけれども、その根底の大畫策は、實に坂本龍馬の腹案によつて實現されたのである、が、坂本はあはれ兇刃のために、あへなくも斃れた、が、事業は、その死とともに成功した、これもなんらかの神祕的な、對比をなすものであらう。

さしにも重大視された、徳川氏三百年の居城、江戸城の明渡しも、肝膽相照す、不世出の英雄、西郷、勝の二大人物の折衝によつて、談笑のあひだに行はれた。これが實

に異狀の事實である、が、これも我日本の萬世一系の、皇徳のいたすところと考へなければならぬのである。

かくて、明治三年には、遷都のことがあり、江戸城は皇居と定められた、さして、皇軍の主將であつた西郷は、御親兵として召され、兵部卿、陸軍大將の榮職にあつたのである。

このとき、つねに西郷のこころの猛將として知られてゐた逸見十郎太は、鍛冶橋營所の隊長として、皇都警備の重任にあつたのだ。

世は海内歸一、泰平とはいふものゝ、まだ佐幕の殘黨が、ともすれば、狂暴の振舞をなす、それ等のものを鎮撫するのが十郎太の職責であつた。

逸見は黒筒袖の羽織に、渦卷の胴亂、太い緒のすげられた高下駄をはいて、腰には例の長い大小刀を差して、鐵骨の扇といふ扮装で、營所の床几にかゝつてゐた。

ところへ、とん／＼と駆けて來た一人の營士、

「隊長どの、京橋の鳥萬で、いま會津藩らしい武士たちが、五六人、拔刀で暴れまは

つてゐるといふことでございます』

『うむ、そうか、よし、おいどんがいつて、とりしづめてやらう、河野、ひさし、ぱり
で、腕を振るつて見るかの』

かういつて、逸見は河野主一郎といふ腹心の部下と、營士を四五人引卒して、高下
駄を、からんころんと、出張した。

見ると、いづれも、つぶ酔ひによつてゐる、武士たちが無茶に、白刃を振つて往還
のものたちを脅かしてゐる。

『え、ッ、ぶう、なにがをかしいのだ、ば、馬鹿め、え、ぶう、は、ッ、やい
ッ、町人ども、なにがをかしい、こらッ、犬め、なにを、泰平面してゐるんだ、きさ
まら、譜代相恩の將軍家が、あの、薩長の奸賊のために、見るかげもなう、覆滅され
たのがわからぬか、やいッ、癪にさはる、火をかけて焼きはらうぞ、はつ——』
たわいもないことをいつてゐる、が、政府に恨みをいだいてゐるやつらなことはた
しかである。

『もし、御旦那さま、お勘定を』

『う、ッ、ぶうッ、勘定ッ、それッ』

朝つばらから押し上がつて、さんざんばら飲食遊興をして、そして、飲逃げをしよ
うといふ、すこぶるたちのわるいやつだ、鳥萬の亭主が勘定の催促をすると、武士た
ちは、たちまち、白刃を突き出すのである。

『へ、ッ、旦那さま、御笑談ぢやありません、お勘定を』

『だ、だから、金をやるといふのぢや』

『こゝいつら、うるさい、なぜたかるのぢや、斬るぞ』

他の武士が、面白半分、刀を振つて彌次馬連中を追つ拂ふ、わつと群集は逃げ散
る。

『わつはつ——』

『だ、だんな、じょうだんぢやない、危いや』

『それぢや、いらんといふか、はつ——』

「おい、お武士さん、町人だと思つて馬鹿にするない、これでもまだ、飲み逃げするほど、心が腐つちやるねえや、支拂ふ金がなけりや、ねえで、くれてやらア、三びんめ、さまア見やがれ」

亭主は、もう業腹になつて、啖呵をきつた。

「おのれ、武士に對して悪口をするか」

「武士が聞いてあきれらア、かつぶしの出しがらども、うぬらのくらつたのは、くれてやるから、とつと、うせやがれ、おい、鹽をぶつかけてやれ」

「ぶ、ぶれいものめ」

「勘定は、くれてやるよ」

「ウ、、、ッ」

武士たちも、これでは、きつて見やうもない。

群集はどつと笑つた。

「おのれ、町人ども、無禮だ」

てれかくしに、とうどよい、武士たちは、群集を追ひながら退散の計畫である。

「それ、あいつら、搦めとつてしまへ」

營士等はばら／＼と駈けよつて、捕へようとする、武士たちは、やにはに刃向つて来た、營士たちは、たちまち傷付いてしまつた。

このていを見ると、逸見は憤然といかつた。

「狼籍ものめ」がら／＼と高下駄を鳴らして、飛ぶと、一人の武士の右手を鐵骨の扇で、はつしとうつた、ばらり、武士は一刀を取り落した。

「えいッ」武士は、いきなり組みついて来た、充分に組ませて置いて、やつと振ると振りとかれた武士は、さつと泳いで、ばたりのめつた。

「やア、こいッ手剛い、やつつける」武士たちは四五人、どつとかゝつて来た。

「手向いすると、ゆるさぬぞ」

「なにをッ」

根が血を好きな逸見、たちまち、柄に手がかゝつた。

『それ、やつてしまへ』一齊に、さつと斬り込んだ。

『えいッ』と、身をしづめた十郎太、大刀抜きうち、さつと拂つた刀に、二人ほど足を斬り拂はれて、どつとたほれた、それと、ほとんど同時に、左り手の武士さつと腰車を斬り込まれて、どたりとたほれた。

のころ二人がやつと斬り込む、一人を外づして、一人の刀をがつきと受けとめた。

『えいッ』と、十郎太が、押しつけると、武士はよろ／＼とよろけた、ところを、すばり、首からはすに、胸へかけて斬りさげた、とたんに、やつと脇腹へ突きを入れて来たやつを、ひよいと腰をひねると、武士はよろ／＼とよろけた、とんと足をあげて蹴ると、ころ／＼と轉げた、十郎太は、とんと背中へ乗つた。

そのとき、河野は、一人の武士を斬つた。

『河野、こいつ、縛つてくれ』

『はア』

十郎太は、ひよつと立つた、が、武士は観念したか、起きようともしない、河野は

ばつと飛びつくと、兩腕を捻ぢあげて、刀の下げ緒で、く／＼つてしまつた。

この武士は會津藩の、久米玄蕃といふ武士であつた、政府に不平があるので、やけにあばれるといふだけなのであつた。

その夜、首にされた。

* * *

ひよつこりと鍛冶橋の營所へ訪れたのは、永山彌一郎と別府九郎。

『逸見氏』

『お、永山と別府ぢやないか、どうした』

『どうだ逸見、今日は我々ときあつてくれぬか』

『ふう、よか、いかう』

『世は一統されてな、薩長の勢ひは、登る旭、いや愉快ぢやな』

『まつたくだ、廟堂の勢力もな、西郷どの、とんと、重きをなしてゐらるゝ、佐幕側のものども、羨ましいだらうな』

「はつ——、不明の罪だ、大義を知らぬ、當然の酬ひであらうわ」
 「それはさうだ」

「とにかく皇基の布かれたのは、だれがなんといつたつて、薩長の力なんだからな」
 「そうぢや」

「いや、愉快なことだ」

「泰平の逸民、管弦を鳴して遊ぶ、なア、我々の力、あづかつて力ありといふわけだ」
 「さうさ——」

「いかう」

「よか」

紺の衣物に、小倉の袴、高下駄を穿いて、十郎太は、永山別府とつれて、肩で風切る薩州武士、ともかくも威勢はすばらしいものである。

三人がやつて来たのは、芝神明前の海老屋といふ割烹であつた。

二階坐敷へ通つて、五六人の藝者たちが揚げられた。

「あら、永山さん、いらしつて」

小徳といふ、二十三四の粹なところ、永山となじみと見えて、ちよろ——と摺りよつて、しなだれる。

「ふ、小徳、貴様の顔を見ないと、どうも淋しいわ」

「などと、旦那、浮氣をしてゐるのぢやない」

「いや、とんだけんぎだぞ」

「あら、とぼけて」くつんと、膝を抓つた。

「あ痛た」永山は、飛びあがつて膝をさすつた。

「ホ、、、ッ」

「痛いことをするやつだ」

「ホ、、、いたくなつて、可愛いわよ」銚子をとつて、酌をする。

「ハ、、、ッ」

「ちよいと、別府さん、はいお酌」

「うむ、美しい顔をしてゐるな」

「まア、いやよ、あんた」

「永山、貴公、もう手に入れたのか」

「ハ、ハ、ハ、ハ」

「抜け駆けとは、氣のゆるせぬやつぢや、」

「小徳、別府氏に一人とりもつてやれよ」

「さア、誰れがよくつて、別府さん」

「そう、うむ、いづれあやめと引きぞわづらう、うふ、その隅の、まるく太つた愛嬌たつぷり、眼の愛らしくかゝやいたやつ」

「ホ、ツ、濱治さんよ、濱ちゃん、お目とまりよ、いゝだろう」

「ホ、ツ、まア、あたし、ほ、うれしいわね」

逸見は、なかでの大將株、一番の上席にゐる、二三人の美形が押しかけて、酌をし

てゐる。

「う、つげ〜」逸見は悦にいつて、かたむけてゐる。

と、一人の藝者、すつきりと瓜實がほ、心もち、眉の濃い、涼しい眼が、すつと切れながである、緋ぢりめんの長じゆばんをのぞかせ、黄縞のお召に緞子の帯、薄色納戸の羽織をはふつて、島田くづしに金簪がびんとはまつて、ひよいと見た逸見を見てにつこりとわらつた。

妖艶な笑顔、瞬間に人を囚へる、十郎太は、ぱつと思はず、盃をとりおとした、かりりと、吸物椀にあたつて、さつと酒を流して、赤くつくられたまぐるの刺肉のうへ、ことりと轉がり入つた、藝者は、「あらツ」といつて、にや〜と笑つた。

逸見はなんだか弱いところを見られた氣がして、すくなからず、あはてた。「鐵代さん、お酌してあげなよ」ちよつと、初のお客に、ばつのあはなかつた鐵代はよいきつかけに、すらりと立つて、逸見の側へきて、

「旦那、お酌」

「ウ、、、お前は鐵代といふのか」

「ほ、そうですわ」

「鐵代か、氣に入つた名だな」

「あらさう」

「うむ氣に入つた、鐵は男の魂、氣に入つた」

「ほ、まア、大變なところが、お氣に入りましたわね」

「ウ、、、つげ、よか」 逸見、上機嫌である。

姐さん株の小徳が三味線をとつて、藝者達、官軍側の武士たちの喜ぶ、ない、づ

くしの唄をうたひはじめた。逸見、永山の連中も聲を張りあげて、一緒にうたつた

(凡そ世の中、ないものづくし、多いなかにも今年のないもの程はない、上巳の大雪

めつたにない、櫻田騒動、とほうもない、そこでどうやら首がない、それにちつとも

追手がなく、一人二人ぢや仕方がない、引き馬どつかへ失せてない、お駕籠があつて

も釣り手がなく、上杉辻番、いくぢがない、お番所どこでも止めてがない、浪人すこ

しも弱氣がない、脇坂取次ぎ出でがない、櫻が咲いても見る人ない、茶屋小屋芝居は
 行きてがない、夷人のはなしは丸でない、道中飛脚のたえまがない、伯耆の噂さはう
 そでない、そこで板倉つゝがない、讃岐の騒ぎは知り手がなく、玄朴この節呼びてが
 ない、薩摩の彌次うま)

「もとへ」 薩摩武士逸見永山とんだところで讀み込みをくつたので、やつきになつた。

「ホ、、、ツ」 藝者たちは笑ひころげた。

「さつまの彌次馬わからない、わアッホ、、、ツ」 藝者たちは、面白がつてやる。

「いかん、會津の彌次馬、とやるのぢや、よか」

「ホ、、、ツ、はい」

「さアやれ」

(會津の彌次馬、わからない、町人金持ち氣が氣でない、老中増すとも見つともない

全體役人腰がない、いづれ世のなかをさまらなない、それでもまづまア軍がない、どう

だかわたしは請け合はない、ないものないはともかくも、京都のあつかひ、勿體ない

めつたなことはないはれない』わつと陽氣にうたひをはつた。

『わつはつ〜、愉快〜』

『ないものづくしは、面白いな永山』

『うむ、はつ〜、とう〜それで徳川城がないまでになつたんだ』

『はつ〜、痛快〜』

杯はとんだ、永山はいつの間にか、小徳と雲がくれてしまつた。

『永山は、ど、どうした、逸見氏、永山はどうした、は〜、ッ、いや、けしからんやつだ、はつ〜』別府は、ぐたりと倒れて、そのまゝ眠つてしまつた。

『よわいやつぢや、さアつげ〜』

逸見は強がつて、やつてゐたが、つひ、酔ひつぶれてしまつた。

*

*

*

*

その夜、逸見の枕席にはんべつたのは、鐵代であつた。

しんをいふと、鐵代は、逸見をあまり好かなかつた、それには、かの女には、藏前

の赤治といふ、材木問屋の息子の、杉田金次といふ、優男の情夫があつたからであるが、じたい逸見は酔ふと無茶な亂暴をするので、ほと〜鐵代も弱つたのである。

それから逸見は三日にあげず海老屋へひたつた。

かれはもう鐵代に夢中になつてゐるのであつた。

あの日であつた、逸見はいつものやうに、黒絹の羽織に高下駄で、ノツコリ海老屋へやつて来たのである、途中でやつたのか、大分よい機嫌に酔つてゐた、とん〜と

二階へ上がると、

『鐵代を呼べ〜』といつた。

『はい〜、かしこまりました』といつて女中は下つた、が、いつまで待つても鐵代は來ないのであつた。逸見は、もう、ぶり〜と不機嫌であつた。

『こらッ、鐵代はどうしたかッ』

『はいッ』女中はひや〜してうるたへてゐる。

『いつになつたら來るのぢや』

「あのう、お坐敷へ出てゐらつしやるので」

「馬鹿ッ」逸見は銚子をとつて、ぱつと唐紙へ投げつけた、紙は破れて、銚子はとんとはねかへつて轉がつた、酒はさつと唐紙から壘へかけて散つた。

「あれッ」女中は驚いて逃げだす。

「酒を持つて来い」

「はアい」女中は恐がつて逃げ去つた。

「酒を持つて来い」逸見は大聲でどなつてゐる。

「はアーい」とん／＼とあがつて来たのは、この家のお女將。

「ホ、、旦那さま、もう、鐵ちゃんも、直きと見えませう、まアお一ツ」

女將は調子よく杯をすゝめると、暴らされたあたりを拭きとつた。

「女將、鐵代を早くまはしてくれ」

「はい／＼、かしこまりました」

「障らぬ神に祟りなし、おほ／＼、ッ」とん／＼と、女將は坐を外づして下へ。

「馬鹿ッ」逸見は獨り無しや苦しや腹をたてゝゐる。

ところへ、はた／＼と入つて来たのは鐵代、すつと戸を引きあけるとにっこり。

逸見は、ぐにやりとなつてしまつた。

「あなた、待つて」

「うゝ、待つたぞ」

「濟みません」

「けしからんやつぢやの」

「でもね」

「なんだ」

「仕方がなかつたものね、お酌」

骨の抜けたなまこのやうに、逸見はぐた／＼となつて杯を出す。

「はい」鐵代は、びち／＼と注ぐ、逸見はとろりとして、杯をすゝつた。

「あなた」

「うむく」

「あたしね、ちよつとしたまで」そはくと落ちつかぬやうである。

「いかん」逸見は淡い嫉妬のやうな感じがして突慥貪にいつた。

「ふん」鐵代は拗ねて横をむいた。

すると怒りつばい逸見はむらくと怒氣が現れた、いきなり鐵代の肩をつかむと。

「こつち向け」じろりとやさしい目が冷嘲やうに見てつんとすまして知らぬ振である

「き、きさま、男があるな」

「ほく」

「なにがほく」だ」

「ほく、そんなことおつしやると、人に笑はれますよ」

「なにッ」

「藝者は男ばかりがあひて、なくつて」

「………、きさま、誰れかに會つて來たんだらう」

「え、お坐敷を退いてから來ましたの」

「また、會ひにゆくのだらう」鐵代は、はつとしたやうすであつたが、

「まア、あんな事」

「いや、それにさうゐない」

「知りませんよ」

「畜生ッ」逸見は矢庭に鐵代の髪を把つて引き倒した。

「なにをするんです、生意氣ばかし」

「おのれ」逸見はとんと肩のあたりを蹶つた。

勝氣の鐵代は顔色を青くして痾高に叫んだ。

「馬鹿がッ」

「おのれ無禮だ」逸見は、かつとして刀の柄に手をかけた。

別に殺す氣もないが、腹立ちまぎれのこけおどしなのであつた、が、鐵代はそれを見たと、あつと驚いて、ばらくと逃げだした。

『あれッ』どいつと轉ぶやうに、梯子段を駆け降りた。
『まてッ』

『あれいつ、狂氣く』逃げながら悪たいを吐くのである。

殺すつもりもないのだが逸見、わつと家中の騒ぎになると引込がつかなくなつた。

『無禮ものめ』といつと追つた、鐵代は逃げながら毒口きく、いまは逸見も憤氣になつてしまつた。

『おのれ待て』ばたくと奥へ逃げ込んだ鐵代は逃げ場を失つて料理場へ逃げ込んだ

『あれいつ、友さん助けて』鐵代は魚板の下へ、小さくなつてかくれた。

料理番の友吉は、ビックリしてひよつと見ると、抜き身の武士が追つかけて来る。

『おつとつく、お武士さん待つておくんなせい』

江戸子の友吉は逸見のゆくてを塞いで立つた。

『え、ッ、退け』

『退きません』

『えい退け』

『かうしたところで刃物三味は、お武士さん、あんまりいゝ圖ぢやアありませんぜ』

『黙れ、無禮な女め、斬るのぢや』

『それが旦那、野暮といふものだ』

『おのれ、口をかへすか』逸見は、刀を振つた。

『おれを切る氣か、こいつア面白い、すつぱりやつてもらわう』

友吉、さつと諸肌を脱ぐと、芝居でよくやる圖で、ぐるりと尻をひんまくつて、ど

かつと、あぐらをかくと、びんと臂を張つて、がんと首を棒にした。

『おのれ無禮者め、覺悟しろ』

『すつぱりやつてくれ』

『お』逸見は、ゆきかゝり、さつと、大刀を振りあげた。

ところを、後からその手にすがりついたのは、海老屋の亭主。

『まア、旦那さま、お腹立ちは、御尤もにござりまするが、小ものはしたのこと

どうぞまア、ごかんべんなすつてくださいませし、もし、旦那さま〜』

『無禮ものめが』

『なにいつてゐやがるんだ、甚助め、おほかた痴話げんくわでもしたあげくだらう、こんなところで、痴話げんくわで、刃物三味の騒ぎをする間抜けがあるかい、親方、うつちやつて置いておくんせえ』

『これ〜、友吉、馬鹿〜、だまつてゐる、お前がわるい』

『笑談ぢやねえ、親方、うつちやつておきなせえ』

『無禮ものめ』

『ま、旦那様、悪い處はわたしがわびますで、はい、どうぞ御勘辨なすつて』

『不埒なやつだ』

『なにいつてやがるんだ』

『なにをツ』

『かつてにしろ』

『おのれ』

『まア〜』逸見の手には、二三人すがりついてゐた。

*

*

*

*

そのとき、とうど、海老屋の前をとほりかゝつたのは西郷であつた、村田新八、別府新助をつれて、薩摩公へ御機嫌伺ひをしてのかへりみちであつた。

『村田、なにかあるかの』

海老屋で、けたましく騒々しいので、かういつて、村田をかへりみち。

『そうですな、別府、見てやれ』

『はア』別府が、やうすを見ると、驚いた、逸見が抜剣して昂奮してゐるらしい。

『先生、逸見氏が亂暴のやうすでございます』

『なに、逸見が、困つたやつだの』

ノツコリと海老屋へ入つた西郷、つゞいて村田別府、ツカ〜と奥へ入つた。

見ると、逸見は、一人の若者を切らうと、手にすがつてゐる、家内のものたちを振

り拂はうとしてゐるのである。

『これ〜』西郷は、ノッコリと立つて聲かけた。

家内のものは立派な武士が三人、しかも、どつしりと重みのある調子で、きつと逸見の方を見て聲かけた西郷のやうすに、思はず逸見にすがつた手を放した。

逸見はおやつと思つて振りかへらうとすると、友吉は頑張つた。

『さア、すつぱりやつてくれ』

『なにを』逸見はさつと刀を振りあげた。

『逸見ッ』力のある西郷の聲が、がーんと逸見の耳に響いた、はつとして振り向くと

西郷が、ヌツクリ、村田別府がしたがつて立つてゐる。

『やつ、これは、先生』

『馬鹿ッ、なにをしてをるのぢや』

『はア』

『はアぢやない』

『はア』逸見は悄悄と刀を鞘へをさめた。

『亭主氣の毒ぢやつたの、若者をなだめてやつてくれ、それあらし料ぢや、取とけ』

西郷は、いくらかのお金を、とんと亭主の前へなげだした。

『へい、どうも恐れ入ります』

亭主や家内のものたちは、疊に額をすりつけてお禮をいふのであつた。

『逸見、一緒に来い』

『はア』西郷は逸見をつれて、鍛冶橋の營所へ入つた。

*

*

*

*

*

逸見は、さんくと西郷に血をとられた、意見をされた、苟も身は無頼の徒をとりしまる營所の隊長ではないか、それが無頼の徒にひとしい行ひをするとはなにごとだ

十郎太も、ぐうの音も出ずに平口垂れたのである。

で、西郷はいろ〜と事の起りを問ひたゞして見ると、逸見が鐵代に百度以上の熱であることがわかつたので、そこは一介の足輕の子から、天下の大立物まで擡出た人

物、世の中の酸いも甘いも知り切つてゐる、で、西郷は逸見がそれほど執心であるならばと、粹をきかせて、海老屋へ話しをつけ、鐵代を受け出して、十郎太にやることにしたのである。

折衝の役は村田新八、すつかり鐵代のしまつをつけて、悄然、勤慎してゐる逸見のところへやつて来た。

『逸見、喜べ』かういつて、村田は出し抜けに肩を叩いて笑つた。

逸見はなんの事やらさつぱりわからず、怪訝な顔をしてゐる。

『はつ／＼／＼、貴公は幸福者だぞ』

『どうしたのぢや村田』

『おいと、一緒に来い』

『そうか、どうしたのぢや』

『まア、いゝから一緒に来い、驚くな、はつ／＼／＼』

逸見はなにやら狐につまゝれたやうな心地で、ノッコリ／＼村田と連れたつた、芝

新錢座町のとある、小じんまりとした黒塀の一構へ、そこへ来ると、村田はひたつと停まつた。

『今日から、こゝが貴公の家だぞ』

『村田、からかつては駄目だぞ』

『はつ／＼／＼、まア入つて見ろ』村田は逸見の背を叩いてから／＼と笑つた。

いよもつて怪しからぬ、逸見はとんと面喰つてゐるのである、村田は玄關へ立て、

『おゝ、これ／＼』といつて訪うと、

『はい』といつて優しい聲がする、どうやら聞いた聲である、逸見はます／＼不審顔

である。すつと戸が開いた、繊細な指が、しなやかに横顔を見せて、疊へくつきりと

吸ひついた、逸見が、おやツと思ふと、女は、すうつと、顔をあげてにつこり、逸見

はびつくり。

『鐵代ぢやないか』

『はう』

『はつ／＼／＼どうだ逸見、嬉しいか、はつ／＼／＼』村田は肩をゆすつて笑つた。逸見はなにがなにやら見當もつかず、嬉しいやうな、怪體なやうな、煙にまかれたかたちである。

『いつたこれ、どうしたわけだ、村田』

『はつ／＼／＼、貴公は今日から此家の主ぢや、西郷殿、志しぢや、喜べ』

『それぢや、西郷殿の』

『さうぢや、鐵代は貴公のものになつたのだ』

『そうか』逸見は嬉しさが込みあげて來た、かれは西郷の心に感謝の涙がはら／＼とながれた。

『そうか』

『はつ／＼／＼、ゆつくりせい、歸るぞ』村田は踵をかへして去つた。

『あなた』さすがに鐵代にも身を洗つた喜びが見える。

床の前に坐蒲團が布かれ、横には机、丸火鉢が側に置かれて鐵瓶の湯がたぎつてゐる

『ほ／＼』逸見に向ひ合つて坐つた鐵代は、女房振つて見える、逸見はまると夢のやうな心地であつた。

西郷の洪笑してゐる幻影がすつと通ると、逸見は涙ぐましい氣がするのであつた。

恨の一刀

兩國の川開き、それは江戸名物の一つである、喧騒の巷には刹那の刺激にいひしれぬ快樂を感じるのである、打ち揚ぐる煙火の数はいくばくもかぞへきれぬ、田毎の月の龍の玉遊び、思ひ／＼に煙火師たちの腕をふるつた、その一發／＼は、貧民たちが、旬日を凌げるだけの金が掛つてゐるのである、それが、ほんの瞬間、どんと打ち揚げる、とんと、天井盤へ、美しい光の繪を描くのである、もの一分もたぬ間に消える、が、其の間の美しさは、尋常に得しれぬものがある、とはいへ、贅澤のきはみである、と共に、人のこゝろをそゝることも大きい、江戸の人達、いや東京の人達は、この日をいかに愉快に享樂するであらうか、河岸にしつらへられた棧敷には、衣裳こ

ぼしの女子たち、牡丹の花をなげたやうに美しく點綴される、川には、綾と織る屋形船、屋根船、思ひく〜とりく〜の意匠、引きまはす幕の色、吊げめぐらす提灯のいる、打ちならす鳴りものも、三味や太鼓、笛につゞみ、はやす調子も歡樂に充ちて人の心を浮きたす、げに、目を驚かさばかりである。

思ふ女をさづかつて、天國の夢あたゝかな逸見十郎太、鐵代のとり膳に、嬉しい食事を取りながら、てうど、その日の川開きの噂をするのであつた。

『あなた』

『うゝ』

『兩國の川開きよ』

『うむ、そうだつたな』

『知つてゝ』

『なにを』

『小徳姐さんの煙火』

『しらんよ』

『素晴らしいのよ』

『そうかい』

『えゝ、それは大張り込みよ』

『ほう』

『でもね、小徳姐さん、なんでも越後の長岡あたりの川袋とかに、そりや素敵な腕のいゝ煙火師があるとかいつてね、わざ〜注文したのよ、入費ばかりでも大變よ、姐さん、そりや威張つてゐてよ』

『そうかい』

『今夜の番組よ、あなた』

『そうか』

『つれていつて頂戴』

『よか』

「まア、嬉しい、ではあたし、舟をかけて置くわ」

「うむ」

「母さん」鐵代は一人の母親を、逸見の手元へ連れ込んで、母とも、乳母とも、氣樂に暮してゐたのである。

「あいよく」次ぎの間の唐紙を開けて、べつから縁の眼鏡を額へ押あげて、鐵代の母のおくま婆さんは、によつと首を出した。

「晩にね、旦那さまとね、煙火見物に行くんだから舟をさがして来て下さいな」

「あいよく、そうかく」おくま婆さんは、ぼとくと立つて、外へ出た。

貸し舟屋といふ貸し舟屋は、どこもかも、もう派手な人達の先約で、空きはなかつた、おくま婆さん、いろくと心配して、やつと川崎屋の圍い屋根舟を一艘借りるところとした。

「やれよくしんど、鐵ちゃんや、やつと借りたよ」

「そう、御苦勞さんでしたわねえ母さん」

「どこへいつても、それ、おあいにくさまよ、でも、やつと川崎屋に、圍いの舟があつたのでう、借りることにしたよ」

「まア、そう、よかつたわね、有難うよ」

*

*

*

*

逸見は可愛い女とたつた二人、そして懐しい徳利も積んだ、折詰の料理も好みもの、新濱町から乗り出したのは、かれこれ五時頃であつた、月島から永代橋、土堤の楊をながめながら、兩國の橋の袂へ出るには一時間ばかり、すると六時、時間はちやどよい、場所へつかぬさきから、もう、遊散氣分で、鳴物で、浮かれて行くものもある、どこの川筋にも、川開きの日の夕刻には、明るい氣分が流れるのである。兩國の橋近くなると、遊船は、まると目をつくほどである、まだ暮れぬうちから、もう煙火は、どうん、ぱんと、空へ白龍をまはせてゐる。

逸見はそらく、鐵代に酌をさせながら、ちびりくと、杯を嘗めはじめた。

黒ちりめんの鳶の縫紋のついた羽織、勝山に結つた鐵代は、水の滴るやうな奥様風

である、十郎太は、どんちゃんはそのさわぎより、しんみりとした悦にひたつてゐるのである。

「賑かだの」

「はい」とたんに、どんと打ち揚げた煙火が黒玉になつて、開かずにはつた。

「おや、黒玉になつてよ」

「うむ、そうだな」逸見は杯を啜つた。

そのとき、どんと、逸見の舟の舳が、他の舟の胴へどんと打ちつけた、なんといつても、ほとんど、漕ぎ分けきれぬほどの盛りなのだから、船頭もよほど注意してゐるのだが、ひよつとしたはづみに打ちつけたのである、それは小揚げの若い連中の陽氣な遊散舟なのであつた。

一杯機嫌で、鳴りもので調子づいてゐる若いものたちであるから、元氣がいゝ。

「やいッ、こん畜生、ふざけやがつて、承知しないぞ」若いものたちは怒鳴りつけた
「このこみあつたなかだもの、しかたがねえやな、いざこざいふない」

さきの出やうで、きかぬ氣の江戸子、川崎屋の若いものはやりかへした。

「なんだと、馬鹿野郎、ふざけやがつて」たちまちなかの一人が、酒徳利を投げつけた、酔つてゐるから見當もつかぬ、ぶんと飛んで川のなかへどぶんと落ちた。

「なにしやがるんだとんちきめ」

とたんに、舟はさつと揺れて、二艘の舟が、ひたりと腹あはせになつた。

「たゝきこはしてやれ」

「わアッ」と、若いものたちは、逸見の舟の提灯を引き千切る、屋根を叩きつける、とんだ亂暴をはじめたのである。

「待てッ」逸見は猛然として立つた、いきなり、一人の手を掴むと、ぐいと引いた、どんと仆れて、こちらの船へ落ちると、とんと船舷へ額を打ちつけた。

「あ痛ッ」

「野郎、たゝんでしまへ」

若者たちはやにはに逸見に武者振りついて、むかうの舟のなかへ引きづり込んだ。

『無禮ものめ』逸見は大聲に吼へると、ヤツと一時に二人ほど川のなかへ投込んだ。
 『畜生』若いものたちは無茶苦茶に組みついてくる、逸見は投げたほし蹴たほす、けれどもなんにせよ狭い船のなかにあひては十五六人、逸見も、もてあましてゐた。
 このとき、通りあはせたのは、薩摩の連中の船であつた。

『やア、逸見だぞ、助けてやれ』

『おゝ』ぱツぱツと、武士たちは、小揚げの連中の舟へ飛び込むと、たちまち、若いものたちを、片つ端から撲り倒してしまつた。

『おい、逸見氏、どうした』

『はつ／＼／＼、いや、こいつら、無禮をしよつたでな』

『怪しからんやつだ』

『どうぞ、ごかんべんを』

若いものたち、かう、武士たちに乗れ込まれては魂も消え込んですくんでしまつた。
 『酒の上だから餘義ない、今日のところはかんべんしてやる』薩摩の連中はそれから

船を岸へつけて中村樓といふへあがつて逸見をなかに盛んに遊んだのであつた。

*

*

*

*

不都合なのは鐵代である、旦那様の難儀をよそに恐い／＼といつてどん／＼船を遠ざけてしまつた、そのうちにいろんな船がなかをへだてる、とう／＼逸見を見出すことが出来なかつた。つまらなくなつた鐵代は舟をかへして、柳橋の土堤へかゝつて、ひよいとほりを見ると、杉田の金次がヌツと立つてじつと自分を見つめてゐる。
 『おや、金ちやんだわ』かう小さく叫んだ鐵代は用事をこしらへて、こゝで舟を降りて、陸まはりであるくことにし、舟とわかれた、いくらかの祝儀が川崎屋の若いもの懐へ入つた。若いものは氣輕るになつて棹を突きながら遠ざかつた。

鐵代は、はた／＼と金次のところへ駆けよつた。

『まア、金ちやん』

『どうしたい、旦那つくわ』

『そんなことは、どうでもいゝよ』

「一緒ぢやなかつたのか」

「一緒は一緒だつたが、途中で小揚の連中と喧嘩をして、さきの舟へ飛込んだのさ」

「それを、置いてきぼりか、ひどいな」

「かまやしないよ」

「ふ、そいつア、豪いや」

「金ちゃん、つきあつてくれて」

「お前とならば、どこまでもさ」

「まア嬉しいわね」二人は直ぐ近くの萬八樓へあがつて、さんぐに巫山戯てゐた。

「鐵代、お前の旦那は、たいそう暴れものだつてことぢやないか」

「あたし、ほんとに、嫌になつちもうわ」

「それでも、こう、黒板塀に見越しの松、ちよつと、わるくはあるめいぜ」

「憎らしいよ、この人は」くつんと、股をつねつた。

「痛い」

「ちつとは、思ひやつておくれよ」

「どう思ひやるんだ、おれア、しよつちゆう、お前のことを思つてゐるぜ」

「そう、では金ちゃん、たまには會ひに来てくれて」

「新錢座町の方へか」

「さうよ」

「恐いな」

「いくぢがないね」

「うれしいがね」

「では、来ておくれ」

「でも、旦那はいつもへばりついてゐるんだらう、戀女房だもの」

「間がいのよ金ちゃん、旦那はね、三日目くららでなくちや來ないことよ」

「そうかい、そいつア有難いな」

「ねえ、いゝこと、金ちゃん」

『ちよいく行くよ』

『嫌しいね』二人はかたくちかつた、このふらちものめらが。

* * *

夕闇が、人の顔を灰色につゝむころ、金次は鐵代のところへこつそりと入り込んだ

『えへん』横戸がすつと開いて、鐵代がにっこりと笑つた。

『お入りよ』

『大丈夫かい』

『大丈夫よ、遠慮はいらないよ』

『そうかい』

『氣がよわいね、それ、本調子にもあるぢやないの、(忍ぶ懸路は、さてはかなさよ、
こんどあふのが命がけ)つて、腹を据えるんだよ』

『そうかな』

『なにいつてゐるんだよ』ぎゆつと手を握つて、ぐいと引つ張つた。とんと金次は内

へあがつた。そこにはおくま婆さん、ぶかりくと煙草をふかしてゐた。

『お婆さん、こんちは』

『おや、杉田の若旦那かへ、はいこんちは』

『氣樂でいゝね』

『はい、おかげさまで』

『不足はなからうがね、お婆さん、お參詣錢だよ』

金次は、とんと金をひねつて、婆さんの膝の上へ置いた。

『すみませんね、若旦那、いつも』

『なアに、ほんの心ばせだよ』

『はい、いたゞきますよ』金さへもらへば、もう、無上とよいことなのである。

金次と鐵代は二階へあがつて、お前一つ、あたし一つ、といつた譯で、小さなちよ
こで、やすからぬおたのしみとある。

『鐵代、だが、なんだな、こうして會つて見ると妙に氣がはづんで嬉しい氣がするぜ』

『ほッ、金ちゃん可愛いよ、お前』

『まつたくだよ、おれア海老屋へも足しげくかよつたが、金さへあればいつだつて會へるんで、つまらぬ氣もしたが、恐いなかに會つた氣持ちはたまらなく嬉しいね』
『あたしだつてそうよ』怪しからぬことを二人がいひあつてゐるときであつた、表から思ひがけなく入つて來たのは、逸見であつた。

『おや、旦那さま、おかへりでございますか、鐵代や〜』

おくま婆さん心得たもので、仰山に呼んだ、それと知つて鐵代も金次も青くなつた
『あら大變だ、金ちゃん逃げて〜、早く』

金次はうる〜物干へ這ひあがつて、やつと屋根へよぢあがつた。

『母さん、呼ばなくつてもい〜よ』逸見は、なにげなく、二階へのぼつて來た。

『おや、おかへりなさいまし』

『うむ』どうもやうすがをかしいので、あたりを見るが別にかはつたやうすもない。
が、逸見は妙な氣もちになつて火鉢の前へすはつて、ひよいと見ると、男持ちの銀

煙管がある。

はてな、かう思つて、逸見が押入れのあたりをきつと氣を配つた、そのとき屋根の上で、みしりツと、踏む氣配がする、耳をすますと、またみしり。

逸見はさつと氣が逸つたが、じつところへて、つと立つと、出てゆかうとする。

『あなた、お出掛け』

『うむ』かういつて逸見は、そしらぬていで出てしまつた。

*

*

*

*

それから、二三日見えなかつた逸見は、ひよこりと歸つて來た。鐵代はさすが胸を苦しめてゐたのであるが、案外逸見がなにげないでいたので、鐵代もほつとした。

じつさい逸見は鐵代を愛してゐたのである、不義をしてゐるのはわかつた、けれど直ぐと殺す氣には逸見はどうしてもなれないのであつた、この三日間、逸見はどんなに苦しみなやんだかしののであつた、が、やつとかれの心もきまつたのである。

『鐵代、向島の櫻が、いまが見頃なさうぢや、行かないか』ちと、垣の出來たと思ふ

逸見からかういはれて見ると、鐵代もほつと胸の重荷がとれたやうな氣がする。

「旦那さまがお出でなら」

「おまへが、嫌でないなら行かう」

「まゐりませう」鐵代は晴れやかに笑つた。

なぜか逸見は笑つて見たが面を外らせた。

二人はつれだつて向島へ行つた。土堤へ植ゑ並べられて、幾百本とも知れぬ櫻は、見るからに心地よく咲きそつてゐた。花と花とが入り合つて、まるで花のなかをとほる心地がする。道化た姿の花見の組が、面白をかしく摺れちがつてゆくのである。ぶらりくと、櫻のなかを、ゆきしした鐵代は軽いつかれを覺えた。

「旦那さま、あたしつかれちやつたわ」

「さうか、では、そのへんで、そうだな、植半で、二杯やるとするかな」

かういつて逸見は二人で植半の奥へ入つた。横に櫻をながめて川面が光つて見える花見の舟がいくつつかく通り過ぎた。鐵代もほんのりと酔つて、なまめかしく見えた

「どうだ、鐵代、酒のほてりを川風に吹かるゝはよいものだ、舟を漕ぐかの」

「えゝもう、あたし、これでけつかうよ」

「はゝッ、まアつきあつたがいゝわ」逸見はあまり氣のすゝまない鐵代をつれて、すぐと植半の裏から、傳馬船をかりて漕ぎ出た、あたりはもうほのくらくなつてゐた。

逸見は漕ぎくとうく大川端まで出た、そのあたりにはもう花見の舟も見えないのである。鐵代はなんとなし淋しくなつて來た。

「あなた、かへりましょうよ」

「……………」

「ねえ、あなた、あたし、淋しくなつてよ」

「……………」無言でゐた逸見は、ついと立つた。

「鐵代」

「なんですの、あなた」

逸見はこれまでこらへた怒が、一度に込みあげて來たやうに、はたと鐵代を蹶つた

ばたり鐵代はたほれた。

「あなた、なにをなさるの」逸見は昂奮にふるえてゐる。

「き、きさまは、よくも、この逸見の顔へ泥を塗つたな」

「え、ッ」鐵代は、びくりとして、立ちかけた腰をべたりと落した。

「えいッ」逸見のかけ聲と共に、ひらりと閃めく刀の光り、ばさつと水をたしくやうな音がして、鐵代の首は、ばたりと落ちた。

刀を左手に持ちかへた、逸見の鐵代を斬つた拳はしきりに落ちくる涙を拭つてゐた

覆面の刺客

西歐の文化に觸れて、ことごとくに眼をまはした岩倉、木戸、大久保の面々、秋水と鍛へた和魂の骨を、すつかりと抜かれてしまつた。

得て達觀といふものは、離れて見る、廟堂、非征韓論者一派、かならずしも腰抜けとばかりはいはれないけれども、かれらが眩惑されてしまつたことはたしかである。

西郷を頭目とする、征韓論一派には、とても齒がゆくてならぬことであつた。

韓國は畏れ多くも、神后皇后、御親征、屬國の國柄ではないか、それがあの剛慢不遜の大院君は、無禮極まることをあへてした、それを捨て置く事が出来るか、これは表面の理由である、西郷はいたづらに戦ひをこのむものではない、江戸城の明け渡しを見ても、いかにその寛廣な人物であつたか、知れよう、その西郷が、名譽も身命も投げうつて唱張する、決して單なる征韓論に過ぎざるものでないことは知れやう、かれは世界の大事の、やがて来るべき趨勢の達觀から不拔の信念のもとに唱提したのである。が、廟堂の諸公は、もう異國の狀勢の、とても、日本の比ではない、ずつとずつと進んだものであると見たので、もしも、韓國のうしろに潜む力が出て来たなら、もう臆病風に、ゾツと吹き込まれてゐるのであつた。西郷にはそれが苦々しくてならなかつた。かれはとうとう、挂冠して故郷に歸臥することゝなつたのである、悶々憂國の恨みをいだいて蟄居する西郷の心事は察するに餘りあるものであつた。

このとき西郷と同意見をもつて廟臣の柔弱を痛憤して、おなじく故山へ去つたのは

高杉晋作、江藤新平などであつた、で、かれらは若い、なまぬるい廟臣に一泡ふかせてくれるといふやうな考へから、それ／＼兵をあげたがたちまち征伏されてしまつた。さアこうなつて見ると廟臣等は勢ひ西郷に注目せなければならぬのであつた。

いはゆる、あくとがばかすのである、神經過敏になるのだ。

「川路、西郷を殺らにやなるまい」

「うむ」大久保利通と、川路大警視とは、ある日かうした言葉を交へたのである、大警視、つまり、いまの警視總監だ、それが殺人の相談をしてゐる、そのあひてが參議大久保卿なのだから驚く、しかも、西郷とは莫逆の友である。二人は、ながいことちんもくした。それもそういふはづである。

「殺らせにやならん」川路はかういつて、きつと緊張した。

「うむ」こんどはあべこべにだまつてしまつた、大久保は、さすがに涙をたへた。

「中原」かういつて川路は警視官の中原入雄を呼んだ。

「はッ」

「岡田、野間、それから書記官の平田と大山を呼んでくれ」

「はッ」やがて、中原は四人を呼んで來た。

「はア」といつて、四人は川路と大久保の前へたつた。

大久保はじつと五人のものを見た、いづれも稜々とした骨のあるものたちである。

大久保は川路の顔を見てにつこり笑つた。

そして、きつと五人を見た大久保は沈痛な聲でいつた。

「どうだ、君方、國家のために、命を捨てはくれぬか」

このごろの武士は義に逸つたものだ、かういはれて、後退りするやうなものはない「いつでも捧げます」五人は、さつと意氣込んで見える、頼もしい有様である。

大久保と、川路は快然と微笑した、この意氣なれば大丈夫である。

「近う寄れ」

「はア」五人はびた／＼とていぶるの上へ臂を突つ張つて、首をつき出した。

「お身達、鹿兒島へ乗り込んで、西郷を刺止めてくれぬか」

『はッ』といったが、五人は思はず面を見あはせた。

さすがに西郷の人望は反対派にもかなりに置かれてあるのであつた。

『どうぢや』

『はッ』

『かれをたほすは惜しい、けれども、かれは高杉江藤の輩とは違ふ、いま皇業の基礎は、まだやうやくなつたばかりだ、もしも、かれが異團をもつたなら由々しい大事だかれが三千の子弟は、濕した爆弾ぢや、いま破裂の口をまつてゐるんだ、一度西郷が立つたならかれの手に參するものは豫想が出来ぬ、よし鎮定は出来るとしても、國家動亂、上宸襟を惱まし奉ることは畏れ多いかぎりである、どうぢや殺つてくれぬか』

『はッ』宸襟の一語は、もう、かれら五人の肺腑をえぐる力があるのであつた。

『誓つて引き受けました』

『よし、やつてくれ』

『しつかりやつてくれ』五人の決意は鐵のやうに見える。

大久保は路銀を充分に渡した。

『行け』

『はッ』五人は一禮すると、勇んで出ていった。

『はッ、勇ましい人達ぢやの川路』

*

*

*

*

刈り込まれた三尺の生籬、三尺の童子にも越える事が出来る、それは西郷の住居であつた、なんの用意も警戒もない、命を狙うものはねらうがよし、欲しければくれてもいゝといつたやうなかり、三尺の縁へ、障子一重、置き臺ランプの灯かげに、くるくると肥つた大入道頭のかげ坊子を、ヌク／＼とうつして、いま西郷は桐野と圍碁の對局とある。

挂冠後は、徒然無聊をきはめてゐる西郷は、悶々の情と退屈を、碁と書とにまぎらせてゐたのである。

『ほう、うまい手を出しよるのう』凝と盤面を見てゐた西郷はぱちりと石をおろした

「は、ッ、痛いところへ打れましたな」かういつて桐野はうんと首をひねった。そのときである、生け垣の下へすつと身を寄せて、そつと邸内のやうすをうかがつてゐる曲者がある、覆面で身軽ないでたちである、びんと尻へ二本の鐺がはねてゐるすつと首をすくめると、小刀を抜いて、生籬を音もなく、すつくと切り開いた。すつと一人の影がなかへ入る、つづいて一人、五人の黒い影がなかへ消えた、と、そのあとから、また、すつと、そのあとをつける一人の黒い影がある、さきの五つのかげが、まつすぐに、すつと縁に向つてすゝむのに、あとからの一つの影は、生籬のうちを傳つて、横にすつとはしつた。

障子にうつした西郷のかげは悠々と太い指さきに、碁石をはさんでうつした。

そのときである、縁の下から、そつとのびあがつて影の人のやうすをうかがつた覆面の影が、首をかへして、あたりをきつとうかがうと、すつと立つた、つゞいてすつと五つ、なかの一つが、そつと縁へ片足をかけて、刀の柄へ手をかけた、つゞいてまた一人が、すつと置石の上へあがつて、おなじく片足をかけた、も一人、また一



(4) 巷の闘亂

方からおなじかまへをする、残る二人は、あたりに氣をくばりながら、抜き身をもつて立つた、黒いかげは、なにやら首であひづをした、すつと、なかの一人が縁へあがらうとする、とたんに、

『えいッ』といふ氣合の聲が縁のしたからした。

『あッ』どたり腰を突いた、それと同時に縁の下からぱつと白刃を振つた影が出た。

『待てッ』聲諸共に、抜き身の一人を、ぱつと斬り落した、一人の抜き身が、

『えいッ、邪魔すなッ』はつしと、白刃に斬つてかゝつた。

残る二人は、ぱつと縁へ飛びあがると、ぱつと障子を蹴外づして、一人が、やつと西郷へ斬りつけた、が、その手は、たちまち捉へられてしまつた、と、も一人は素早く躍り込んだと思ふと、ぱつと仆れて桐野に捻ぢ伏せられてしまつた。

外の抜き身は、白刃のために、びんと刀を打ち落された、やつと組みついた、どつと、四つの足を踏むと見るまに、一人は、ぱつと投げとばされた、そして、その上へ、どつかと一人のために踏みしかれてしまつた。

なかの二人は刀を揉ぎとられて、悄然と、西郷の前へ引き据えられた。
 『先生』西郷が外を見ると、逸見が一人の男を組み敷いてゐる。

『おゝ、逸見か』

『はゝゝッ、馬鹿なやつらでござる』

『はつゝゝゝ』大きな西郷の笑ひ聲に、なかの二人はふるゝと慄えた。

『こらッ、なにやつだ、馬鹿ものめ、なにやつだ、いへ、いへ、えいはいはぬと、おのれ』

逸見は、さゝえのやうな拳を振りあげて、打ち据えやうとした。

『待てッ』西郷は手をあげて止めた。

『はア』

『よか、逸見、こつちへつれて来てくれ』

『はッ』

『立てッ』逸見は曲者の衿をとつて、縁へ引き据えた。

西郷は臺ランプを寄せて、三人の面をじつと見た、そして、じつと眼を閉ぢた。

が、眼を明けると、

『逸見、斬つたやうだつたの』

『はア、二人斬りました、一人は足を拂つたゞけでござす』

『そうか、手當てをしてやつてくれ』

『はア』逸見は、しかたがないから、布をとつて手當てをしてやらうとすると、その

男は、手早くわれと脇差で脇腹を突き刺して自殺してしまつた。

『おゝ、死なしたか』西郷は、かういつて口をとぢた。

なかの二人も、その一人が、自殺を知ると、やにはに自殺をしようとした。

『まてッ』その手はおさへられた。

『馬鹿ッ、命は大切にせい、さア、早くかへつてな、西郷は、あはてものではないと

いへ、よか、行け』

『はッ』二人は思はず、はらゝと涙を流した。

『よか、行け』

「御免ッ」二人は、縁から下へおりると、手をとつて泣いた。
西郷はやがて拳で、涙を拂つてゐた。

江藤や高杉の亂に、さなくてさえ激しやすい、青年たちの血、西郷の私學校の三千人の子弟等は、騷擾の血に燃えてゐる、いまも事あれと、手ぐすね引ひてゐるときなのであるから、西郷は大久保の手で刺客に來た、園田野間の兩人を、人知れずかへすと共に、死體も、こつそり片付けたのであるが、このことが誰れいふともなく、私學校の生徒たちの耳へ入つたのである。

「おい、聞いたか、大先生が刺客に襲はれたさうだぞ」

「うむ、聞いた、怪しからんやつらだ」

「聞けば、大久保の密命を受けて來たのだといふことだ」

「なに、大久保」

「そうだ」

「大久保卿は、先生無二の親友ぢやつたぢやないか」

「だが、征韓論このかた、びんとそりがあわないなんだ」

「それだといつて、大先生を斃さうとは言語同斷だ」

「それには背後に幾つかの力がある」

「うむ」

「まづ筆頭が岩倉公、木戸なんぞの廟臣たちだ」

「そうだ、腰拔廟臣たちが、西歐の文化に、ぞつと怖ぢけがついて大先生が目の上の

瘤になるんだ、それでおのれらの非を掩ふために大先生を失はうとするんだ」

「怪しからんことだ」

「大久保がそんなことをたくらむ位では大先生のお身の上も安全とはいはれぬぞ」

こんなはなしをしてゐるところへ、ノツコリ入つて來たのは、逸見十郎太。

「逸見先生」

「は、ッ、だいぶ議論がはづんでゐるの」

「先生、ほんとですか、大先生が刺客に襲はれたといふのは
「知らんよ」

「大久保の手で、五人襲ひ入つたのを、三人は斬られ、二人は大先生のおなさけでかへされたと、もつばらの噂さですが」

「そうかい」

「大先生は維新の元勳だ、それを腰抜けの廟臣たちが、大先生を陥入れ、その上暗殺をくはだてるとは不都合だ、もう我慢は出来ません、先生、大先生を説いて、事を擧げてくだされ、頼みます、先生」

「はッくく、まあせくな、西郷どの意中、なにごととも勅諭に御恭順ぢや」

「その勅諭といふのが疑問だ、君側の姦、岩倉一派の廟臣のさせるわざだ」

「黙れ、勅諭を批評するは恐れ多いことだぞ」

「はッ」生徒たち、ひしやりと頭を押へつけられてしまった。

*

*

*

*

*

そこへ、ばたくと駈けて来たのは、池邊吉十郎。

「おい〜みんな〜」

「おい、なにごとが出来た池邊」

「やア、逸見先生」

「うむ、池邊、どうした」

「いよく、事を擧げるの外ありませんぞ」

「これ〜、あはてるな、どうしたといふのぢや」

「先生、もう、廟臣等姦賊、朝権をかりて、先生討滅のくわだてはたしかに見えまして、いま、官兵等、赤新丸へ、ひそかに彈薬庫を開いて、積み込みにかゝつた由でございます」

「なんだと、うーむ」

「これ、討滅の用意と見ないでなんと見ませう、ことごとくにいたつては、もう猶豫は出来ませぬ、先んずれば人を制す、一刻も猶豫は出来ませぬ、機先を制して、彈薬を

奪ひとり、一擧に事を起す外ありませぬぞ」

「……………」逸見は、うんと考へ込んだ。

「おい、同志を呼び集める」池邊は氣早に生徒たちにいひつけた。

「おゝ」

ばらばらと二三人駈け出した、間もなくどやどやと三千の生徒達が押し掛けて来た。

「逸見先生、許してください、彈藥を渡してしまつては、もう、すべては進ぎてしまいます」池邊は涙を振るつて熱してゐる。逸見はきつと覺悟した。

「よし、やれ」

「萬歳ッ」三千の子弟は、どつと喜び勇んで、袴をとり、袴の股立ちをあげた。

一散に彈藥庫へひた走り、一隊を二つにわけて、一手は彈藥庫、一手は赤新丸へ襲ひかゝつた。

不意をくらつた官兵等は、たちまち散らされて、やすくと彈藥庫は占領されてしまつた。

倉庫には二十六萬四千發の彈藥があつたのだ、生徒たちはもう我事なれりといつたやうに喜んだのである、これだけの彈藥があれば、腰抜け官兵が、どれほど寄せて來ても大事ない、高杉江藤の殘黨、それから征韓論同意のもの、西郷黨のもの、いよいよ大先生を動かせば、もう勝算は歴々といつたやうに勇みたつたのである。

生徒たちの意氣組は、すばらしいものである、もう寢食もわすれて彈藥庫を兵器製造所にあて、晝夜兼行で、武器の製造に着手したのである。

事、こゝにいたつては、桐野篠原村田の面々も、もう餘儀ないはめとなつたのである、廟臣の措置のよくないのは、もう衆人の見るところである、かうなると群集心理で鬱勃とした、抑へられた反感が、一時に燃えあがつて來るのである、縣令、大山綱介までも、いまは身を入れて、便宜をはかるといつたやうなこゝとなつたのである。

*

*

*

*

そんなことゝは知らず、悠々、雲烟野鶴にしたしむ西郷は、そのとき獨り愛犬をつれて、大隅の高山郷といふところへ、狩獵に出掛けてゐたのである。

そのとき、西郷は疎林を縫つて、一羽の雉子を見つけたので、はたと立ちとまつて獵銃に狙ひをつけてゐるところであつた。

「兄上さまく」ばらくと山を駈け降りてくるものがある。

西郷は不審に思つて、振りかへつて見ると、弟の小兵衛が、息を喘ませて駈けつけたのである、西郷はにつこり笑つて、

「小兵衛ぢやないか、うむ、どうしたのぢや」

「兄上さま、大變ですく」

「なに、大變ぢやと、ほう」西郷は銃を提げて、じつと、弟の顔を見た。

「なにごとか起つたのか」さすがに西郷もはつとした、おのれを取りまく雲行きの不穏なのは、やがて来るべき不祥事を豫想されるのであつた。

「どうした」

「三千の子弟ら、彈藥庫を奪ひとり、暴舉を起しました」

「え、ッ」

さすがの西郷も、がらり銃を投げ出して、どたりと腰をおとしてしまった。

「お」

「事態、容易ならぬありさま、兄上さま、一刻も早く、おかへりを願ひます」

「うむ、で、桐野、篠原、村田たちはどうしたか」

「いまはよぎない、暴舉に組みしてございます」

「そうか、そうか」西郷は默然として腕を組んだ。

「天ぢや、命ぢや、西郷の孤忠もをはりぢや、小兵衛、行かう」

「はア」さすがの西郷も歩みに力がなかつた。

*

*

*

*

西郷舉兵、この報は雷のごとく廟臣らの耳をうつた。

仰々しい會議がひらかれた。

まづまつさきに海軍の川村純義中將を向けて、海上から敵をおびやかすこと、それから陸からは征討第一軍として、野津鎮雄少將、三好三浦の兩少將を添へて向はせ

ること、目指すところは熊本城、こゝで西郷の東上を喰ひ止めようといふのであつた。川村は高尾丸に乗り込んで、逸早く、鹿兒島沖へ進んで、まづ砲撃を開始した。

づどん／＼と砲煙が天を飛んで、鹿兒島の市民たちをおびやかした、

剛勇無比の、桐野村田逸見たち、このありさまを見ると、ぐつと癪に障つた。

『小ざかしい敵の振るまひだ、一泡ふかせてやらう』

少数の手勢を率ひて、闇に乗じて、高尾丸へ乗り込んだ。

ざつ／＼と舟を、船側へびたり漕ぎよせると、舷へとりついて、まつさきに躍り込

んだのは逸見、大刀を振り翳して斬り込んだ。

『それ、賊の襲撃だぞ』

どつと喚いて、官軍の兵士たち、前後左右から斬りかゝる、大刀は、閃電のごとく

にきらめいて、たちどころに血煙りを吹かして斬り倒す、桐野、村田、手勢の一隊、

どつと叫んで斬り込んだ。

劍戟のひびきは夜の闇をつんざいて凄まじい音を波へ傳へる。

ど／＼と官兵は崩れて、艦長室の方へ逃げ込む、得たりと勢に乗じた一隊は、どつと叫んで追ひ込んだ。

と、そこに待ち構へたのは、川村中將、さつと、銃の襖をつくらせて、いざといは

ば、一撃といふありさまである。

さしも、桐野、村田、逸見もこれには驚いた、槍襖くらゐなら、まださほど恐れぬ

銃のふすまではちよつと近づけぬ。

『うてッ』川村の號令に、ど／＼と、打ちかける鐵砲に、忽ち七八人斃された。

た／＼と、桐野の一隊は後へ退がつた。いまは、逃げながら奮戦して、やうやく、

もと船へ、辛くもとびのつて、残念ながら闇にかくれた。

が、高尾丸の、官兵の死骸は山と築かれたのである。

*

*

*

*

*

西郷の軍議は決定した。

第一に、鹿兒島から、日向路へ出て、二手にわかれ、一は熊本から筑前を経て、豊

前の小倉へ至り、それから馬關へ出る、一は豊後から伊豫の宇和島、土佐の高知へ渡り、大阪へ出て、東上の確策を樹てるといふ計畫であつた。

で、一萬三千の兵は、四陣にわけられた。

第一陣は、篠原國幹、第二陣は西郷、第三陣は池上四郎、第四陣の殿軍は桐野利秋であつた。

逸見、村田は西郷の手の將校であつた、別府九郎、同新助、河野主一郎、山野田市助、伊集院大介、西郷小兵衛なんぞ、やはり西郷の手の將校であつた。

出發は明治十年二月十一日、あだかも、紀元節の日であつた。

第二陣は、いま出發の用意の際であつた。

このさわぎのなかへ、牛を牽ひてとほるものがあつた。

それを見た逸見は、たゝつと走つた。

そして、牛の側へはたと立ちとまつた。

『先生』逸見は大聲に西郷を呼んだ。

西郷は、じつとその方を見た。

『因循姑息の腰拔廟臣、軍神への血祭りに、えいッ、やッ』

すらりと抜いた強刀、氣合と共に、さしも大牛の首をころりと切りおとした。

『はッくくく』西郷は心地よく笑つた。

兵卒たちは、どつと歡呼の聲を揚げた。

『はッくくく』

逸見は、ぼんと、牛の代にあまる金を牛飼の男に投げあたへた。

『出發ッ』

合圖の太鼓が、どつと鳴つた、勇氣凜々とした鹿兒島健兒の一隊は、隊伍を正して、堂々と繰り出した。

*

*

*

*

皇徳神聖の旌旗は、へんべんとひるがへつて、十八日からは、熊本城攻撃となつた
主將は、籠城の名將、谷干城であつた、參謀は樺山中佐、兒玉中佐、奥少佐なんど

であつた。

實に、西郷の興敗はこの一戦にあるのだ、敵も味方も、必死の攻守であつた。城將谷中將は、死力をつくして守つた。

品川彌次郎、川上操六なんども、密かに城中へ入つて、防戦につとめた。

十九日の朝であつた、池邊吉十郎の率ひる一隊は、朝もやに花崗山へよちのぼつた。そして、山上から熊本城を見おろして、大砲を射ちかけた。

どよ、どよと射ち込む砲弾に、あはれ熊本城の天守は、美事、射ち込まれた。

がらくくと天守は崩れる、どつと火が起つた、城兵は狂氣になつて、鎮火につとめる間に、火は兵糧庫へさつと燃えうつした。

「やツ、兵糧庫をおとすな」

城兵等は、大狼狽して狂氣になつて騒いだ。

このやうすを見た西郷軍は、

「それ、天守へ火が掛かつたぞ、乗り込め」

あだかも、この方へ向つてゐた逸見の一隊は、どつと叫んで寄せかけた。

「進め」

馬上の逸見は、雨と降り来る弾丸をおかして奮進した。

が、城兵は、城門をとざして敢然として防いだ。

城兵の撃ち出す銃弾に、前列は、ばつたくと斃れる、けれども、遮二無二踏み込

まんと意氣組んだ逸見の一隊は、屈せず猛進した。

このとき、兵糧庫の火に驚いて駆けつけた、谷、樺山の兩將、もう四千の城兵に城門の固めを嚴重に、攻撃軍の奮戦を死守した。

見ると、逸見の一隊、手薄である、が、決死の進撃に、城門へかゝつた。

「撃退」

精悍な谷干城、猛然として號令した。

城門はさつと開いた。

「それ」逸見は、はげしく號令した。

猛烈な肉迫戦となつた。

谷、樺山の兩將は、陣刀を振つて、獅子のごとく、斬つて出た。

「やア、主將だ、討ち取れツ」

逸見は躍りあがつて、たゝつと、馬を乗り込んだ。

逸見は面もふらずに、まつしぐらに、谷を目蒐けて突き進んだ。

「退れツ、逆賊」ツ

谷は奮然として、大刀を合せた、切先から火花が散つた。

逸見は、是が非でも、城將谷を討ちとらうと、強刀を激しく斬りかけた、さしも

の谷も、死にもの狂ひの狂ひの大刀先きに、受け手がおちて、さつと、股を切り付けられ、たゝつと馬を躍らせた。

「おのれ待てツ」

逸見はいらつて追ひ打つのを引き外づして、谷は、ぱつぱつと、駈け出した。

「退けツ」

城兵は、どつと、城門内へ逃げ込んだ。

「追ひ込め」

逸見は天魔の怒るやうに、城門へ追ひ入つた。

すると、門内に伏せてあつた城兵が、一齊に、どゝつと、鐵砲を撃ちかけた。

逸見の手勢は、ばた／＼と射倒された、猛烈な狙ひうちに、逸見の一隊は、たゝ

つと退つてしまつた、城門は、とんと閉された。

「えゝツ、残念、討ちもらしたか」

十郎太は齒がみして怒つたが、どうすることも出来ない、城中から撃ち出す銃弾を浴びながら、こそ／＼と退却した。

* * *

西郷の熊本城攻撃は、四十餘日にわたつて、激しく攻めかけたが、巧妙な、城將

谷の謀略、籠城に、つひ、攻略する事が出来なかつたのである。けれども、籠城の妙も、主とする力は糧食である、たとへ、孔明、楠公の秘策を

もつても、糧食がつきては、もう、おしまひである、熊本城も、いまは糧食がつきて来た、馬を屠り、藁をかてとしても、もう、こゝ數日をさへ得るかどうかの運命となつた。

けれども、とにかく、孤城を守つて、四十餘日の維持をした事は、西郷には思ひも受けぬことであつた。

これがために、西郷軍は、どのくらひ計畫に齟齬を來たしたかわからぬのである、たとへ、いま落城となるとしても、西郷軍には、もう、かなりの打撃である、けれども、もう熊本城の運命も、こゝ數日にきまつたのである。

ところがこゝへ、西郷軍には、もう絶望の事實があらはれたのである。

それは、征討の大軍が、堂々と近寄つて來たのである。

征討使東伏見の宮さまは、總司令の山縣有朋、高島鞞之助等をしたがへて、數萬の軍勢をもつて、押しよせて來たのである。

もう熊本城の落城を目の前にしながらも、西郷軍は、もう退却の外はなくなつたの

である。

萬事窮す、もう運命はきはまつたのである。

西郷は、他境の土となるよりも、おなじくは、郷土に骨をとめようと思つて、もう、手に入る熊本城を捨て、退却をはじめた。

かれはもう、いまとなつて、人を傷けるを欲せなかつたのである。

秋風蕭殺として、破れた旌旗は、伏せられて、悄悄として、西郷の軍は、日向地を経て、城山へまで、退いたのである。

皇軍は、破竹の勢をもつて、びた／＼と押しつめて、城山を、ひし／＼と取りかこんだのである。

維新の元勳、西郷も、いまは朝露のたよりなき、皇敵の末路、惘々たるありさまである。

明珠を碎く

二月十一日の擧兵以來、四十餘日の熊本城攻撃に功なく、轉退また轉退、五ヶ月の轉戦に、西郷軍は、ほとんど敗残のみじめさをまざくと感じながら、城山へ立て籠つて、最後の日を待つたのである、無論いまは、生きるのぞみも希望もなにもないのである。

たゞ死を待つばかりである。

が、故山である、ほつとした感じが、一黨のいまの氣分である。

西郷は、もう、天命を知つて、悠々たるものであつた。

さすがに、皇軍も、西郷の偉勳を思ふと、無下に踏みじることをせなかつた。

その日、九月二日であつた。

残兵は僅かに百餘名、衣は破れて見るかげもない、西郷は、この、悲惨な部下のやうすを見ると、覺えず涙ぐましくなるのであつた。

と、同時に、自分のために、身命をなげうつてしたがつて呉れるものたちに、いひ知れぬ嬉しさを感ずるのであつた。

酒といつても酒もなし、冷々とする洞穴のなかに、百餘名は、淋しくうづくまつてゐるのである。

ときたまに、砲彈の音がする。

『桐野』

『はア』

『おいどんの、いま、詩をつくつた、吟じてくれまいかの』

『ほう』

西郷は、さらくと、書いて、桐野に渡した。

『逸見』

『はア』

『おぬしは、舞うてくれ』

『はア』

逸見は、破れた衣類に、垢染んだ布の鉢巻をした。

と、桐野が、

『では逸見、はじめろぞ』

『お』

桐野は聲を張つて吟じ出した。

孤軍奮闘、圍みを破つて還る。

一百里程、絶壁の間。

我劍は既に摧け、吾馬は斃る。

秋風骨を埋む、故郷の山。

吟聲は綿々として怨みを含み、舞踊の足は悲憤にふるえた。

吟ずる人も、舞ふ人も、ともに泣いた。

一坐蕭然として、涙を呑むのであつた。

このとき、悄然と入つて來たのは、小野田市助であつた。

かれは河野主一郎と共に、敵状偵察に出たのであるが、高島鞆之助の手の哨兵に捕へられた、そして、總司令、山縣の面前へ引き出されたのであるが、山縣は、なにやら、一封の書を小野田に渡して、これを西郷に渡して、二十三日の午後五時までに回答するやうにといひつけたのである。

その意味は、おほよそは讀めてゐる、小野田は、捕はれたことが恥かしい氣もするが、また、西郷の命をまつとうすることが出来ればとも考へながら來たのである。

「お、小野田だな、どうした」

西郷はかういつて聲かけた。

『はア』小野田は事實をはなして、山縣の書を西郷にわたした。

『ふむ、狂介がか、ふむ』西郷は、封を切つて讀みくだした。

それは勸降狀であつたのだ。

『はつ／＼、おいどんな、山縣の前へ這ばうことア、ならんわ、はつ／＼』

西郷は、から／＼と笑つて、山縣の書狀を、ぐる／＼と丸め込むと、ぼんと火のな

かへ投げ込んだ。

『勸降状でござるか』

桐野は、かういつて訊いた。

『うむ、山縣め、小ざかしい奴だつたが、はつ／＼』

『無禮なやつだ』

桐野、逸見、村田の一黨は、忌々しさうになつた。

官軍の一統は、午後五時までに、西郷の回答がなければ、一舉に勦滅する考へで、時刻のうつるをまつてゐた。

そのとき、西郷等は、悠々と、洞穴のなかで、やがて来る運命をまつてゐた。

『桐野』

『はア』

『君と、久しく碁を打たなかつたの』

西郷は過ぎた日を、桐野と圍碁に送つた當時のことを思ひ出したのである。

『そうすな、もう、三百日になりますな』

『どうだの、久しぶりで、一局圍まないかの』

『そうすな』

日はもう中天に掛つてゐる、もう、五時間を経れば、必然に官軍の總攻撃は開始されるのである。

誰れかが、碁盤をばこんで来た。

西郷と桐野は石をとつて、じつと顔を見あはせた、二人の胸には、無量の感慨が湧くのであつた。

村田逸見の二人は兩側で見えてゐた。ぱちり／＼と石は置かれた。

英雄胸中閑日月あり、碁に、まさに死の來るのも忘れたかのようである。

一局、また一局、まさに三局目のときであつた、山をつんざくやうな砲彈の炸裂が轟然として、洞中へ響いた。

五時となつたのである。

部下のものたちは、はつと氣込んで、ばらばらと洞窟の外へ出た。

西郷は知つてゐるのか知らぬのか、安然と、一石くんと打ち込んでゐる。

しばらくすると、また、どうんと一發の砲聲が聞える、ついでにまた一發

『先生、御用意』

外の部下たちが洞中へ聲かけた。けれども西郷は起とうともしない。

またしばらくすると、どうんくんと三發の砲聲が聞えた。

そのときには、第三局の碁はをはつたのである。

『いよ／＼、總攻撃と見えるの』

『さうですな』

まるで人の事をはなしてゐるやうなありさまである。

すると一人の部下が、急に飛んで來た。

『先生、早くお立ち退き、敵の一隊は、この方へ向つて進撃します』

かういつて、ばら／＼と駆けさつた。

西郷といふ名に惱えてゐる官軍は、城山がかくまで、何の要害もない、また、かくも少數な、そして、死を待つ一團であるとは思はなかつたのである、必ずや、最後の決戦、かなりの犠牲を覺悟して攻めのぼつたのである、ところが、案外にも、手ごたへのない賊のありさまに、氣を抜かれながら、いま一隊の官軍は、洞穴の方へのぼつて來たのである。と、あちこちに身を潜めてゐた西郷の殘兵たちは、どつと叫んで斬つて出たのである。

飢えとつかれに、力はもうおちてゐるのであるが、いづれも、一意鐵石の烈士である、まして、死を決した切つ先きである、鋭い激しい、官兵は、見る間に斬り伏せられるのである。

西郷は、洞穴の岩を楯に身を護りながら、部下のものたちの最後の勇戦を、さも快げに、莞爾として見てゐた。

いかに、西郷の殘兵、勇を振るつて戦つても官兵は多勢、大分とたほされた、と、

一部の官兵は、洞穴の方へ、ばら／＼と駆けて来た、入口まじかのところで、はたと立ちとまつて銃口を洞穴へさつと向けたのである。

西郷の身側には、桐野村田逸見の外別府新助、弟子丸應助なんぞ、七八名に過ぎない、かれ等は、びた／＼と、洞穴の壁に身を寄せて、射ち込む玉を避けたのである。

洞中は、ひつそりかんとしてゐる、官兵たちは、どや／＼と洞穴へ入つて来た、なかは暗い、そして冷やツとしたなかに、臭みをおびた気が鼻を打つのである。

『踏み込め』

なかの一人、かういふと、先きに立つてノソ／＼と入つて来た。

五六歩入ると、ばたりたほれた。

『それ油断すな』

と、一同は、たじ／＼と退ると、なかの人達は、どつと叫んで、斬つて出た。

接近してゐるので、銃は役立たないのである、官兵たちは、賊徒の頭目連を討つて功名しようと、必死となつて斬つてかゝる。

あひては名にしおふ、桐野村田逸見の諸剛、官兵たちは、たちまち、ばつた／＼と斬り捨てられる。

このとき、西郷は、いまは、どこか、静かなところへ避けて、最後を遂げようと、別府、弟子丸を先きに立て、徐かに洞穴を出て来た。

西郷が洞穴から出て二三歩、づどんと一聲の銃聲、西郷は、よろ／＼として、どたりたほれた。

『あつ』

別府新助は、ぱつと立つて、西郷をかばつた、そのとき、玉の如く飛んだ弟子丸應介は、四五間へだ／＼つた大樹の蔭に潜んでゐた一人の官兵を、真向から切り下げた。

西郷は、股を射抜かれたのである。

日はもう暮れかけてゐた、山の隈々、木の茂みは、もう闇に、人影をつゝむ頃である、西郷等が、身を潜めるには、都合がよい、別府新助は、西郷の傷の手当てをする、と、すぐと、背に負つて、木の下闇、草木のなかを縫つて逃げ出した、つゞいて、桐

野村田逸見の連中は、是非とも西郷と死を共にしようといふので、殿りして、油断なくあたりに氣をくばりながら、したがつたのである。

一同は、やつと岩崎谷まで逃げのびた。

西郷、桐野、村田、逸見、別府、淵邊の五人であつた。

日はもう暮れて、相對する人達が、やつと顔を見知るほどである。

別府は、用意して來た毛氈を布いて、西郷をすはらせた。

そのときには、もう、官軍の追ひても見えなかつた。

西郷はしづかに短刀をとつた、そして、桐野以下の名を呼んだ。

『桐野、夢のやうぢやの』

桐野は默然として、しづかに西郷の顔を見た、西郷は、ニッコリと微笑んだ、が、

その眼からは、涙がほろりとおちた、それから、村田逸見と、順々に顔を見た、西郷

の眼には、涙をたゝへながらも、満足の色が充ちてゐる。

『西郷は逆賊ぢや』

かういつて、西郷は、こらへかねたやうに哭いた、一同は、たまりかねて、わつと泣いた。

ゴウウとなる秋の風が、木の枝をうつて淋しい。

しばらくしてから、西郷は、きつとして、

『逸見』といつた。

『はッ』

『介錯してくれ』

『はッ』

西郷は、しづかに、胸をくつろげると、そのべんべんたる腹をさすつた、そして、短刀をとつた。

やがて、さつと左の脇腹へ突きたてた、そして、すつと右へ引いた。

『さア、介錯ッ』

後ろに立つてゐた逸見は、落ちて來る涙をとめかねてゐたが、きつと、かう西郷の

聲がかゝると、はッと氣をとりなほして、ふるえる手で、刀を振りあげた。

『打てッ』

『はッ』

逸見の強刀はひらめいた、西郷の首は、ころりと前へおちた。

そのとき、桐野もすでに腹を切つて居た。

『逸見たのむぞ』

逸見は泣くく、これも斬つた、村田も介錯してやつた。

淵邊の首は、別府が介錯した。

このとき、逸見はもう涙をとめて、

『別府』と呼んだ。

『はア』

『西郷どの首、敵に渡せぬ』

『おほせまでもない』

『どこぞ、よいかくしははないかな』

『さア』

別府は、西郷の布いてゐた毛氈を切つて、それで、西郷の首をつゝんだ。

二人は、いひあはせたやうに、行くともなく歩いた。

二人は出るともなく、淨光明寺ヶ岡へ出た、これは城山のつゞき、櫻島を目の前

にしてゐる。

『こゝがいかの』

『そうだな』

別府は脇差を抜いて、松の根方を、一尺ほど堀つた。

『よからう』

別府は、そのなかへ、西郷の首を入れた。

二人の目からは、感にせまつた涙がながれた、しづかに土はかけられた、上へはそれと知られぬやうに生ひ草でおほはれた。

『よか』

二人はほつとしたやうす、そして、いまさらのやうに、そのまへに額づいて、なにごとかいつてゐた。

* * *

『別府、貴公はどうする』

『西郷どの、奥方はじめ、御一統の前途を見とどけなければならん』

『うゝ』

『して、あんたは』

『おいはの、山縣に、肝を冷させてやる』

『うむ』

『斬り死にするんぢや』

『おゝ』

『さらばぢや、別府』

『逸見どの』

『もうこれきりぢや』

『……………』

二人は手をとつて、しばし、面を見あはせた。

やがて二人は、あちこちへわかれた。

逸見は最後の一刀、思ひ切り斬つて斬つて、斬りまくつて、官軍の腰抜け連に、薩摩武士の必死の切つさきがどんなものだからせめてやらうと、たつくと駈け出した。官軍の方では、案外にあつけない總攻撃であつたが、肝心な逆賊の張本、西郷はじめ、桐野、村田、逸見の諸將を逸してしまつた、山また山、谷また谷と陟つて、方々さがしたが、かいてもく、西郷等の姿は見出すことが出来なかつた、で、明日の夜明けを待つて、捜査することゝして、官軍は陣營へ引き取つたのである。

いづれにもせよ、西郷一味の残滅は、もうたしかなのであるが、西郷、桐野の首級を見ないうちは、まだ安心することは出来なかつた。

官軍の本陣では、山縣以下、高島、野津、川村の一統は、とにかくも、西郷の一味を剿滅して、ほつとした心であるが、西郷の生死不明なのに、すくなくらず頭をなやましてゐた。

『まさか、いまになつて、遁れ去るやうなこともあるまい』
かういつて、山縣は、じつと腕を拱んだ。

『いづれかで、自殺したものでござらう』と、高島はいつた。

『うむ』かういつたものゝ、それはだらうの、われとなくさむるものであつた、諸將の顔には、まだ晴れた氣色はない。

とたんに引きまはされた幔幕のなかへら、ぱつと飛び出した男がある、破れたどてらに髪のもぢやと亂れた、血走つた顔に、大刀を持つてゐる。

『なにものぢや』諸將は、きつと身がまへた。

『はッ〜〜〜』と、曲者は、から〜と笑つた。

『無禮ものめ退れッ』山縣は、一喝した。

『黙れッ狂介、はッ〜〜、朝敵の汚名を受けて、身は城山の露と消えても、西郷どの、國家の大忠臣、汝等ごときものに敗れて、空しくなつたは、運命だわ、おいわな、西郷どの、こゝろとたのまれた逸見十郎太だ、薩摩武士の骨を見る』

やにはに十郎太は大刀を振つて、まつしぐらに山縣へ駆けむかつた。

とたんに、ぱつと、うしろから飛びついたのは、高島鞆之助、さすがに逸見は、ずる〜と、後ろへ引きさられた。

『えいッ、邪魔すな』身はつかれてゐるが、十郎太、必死の力にぱつと、高島を振りといて、振りかへりさま、やッ、と、高島のぞんで、眞つ二ツと斬り込んだが、そのとき早く、高島は、かちん、刀の鑢に受けとめた。

『おのれ』逸見は、いらつてまたも打ち込んだ、と、こんどは刀を抜いて、がつきと受けとめた。

『えいッ』

『お〜ッ』

二人は攻めつけたが、高島はぢり／＼とさがつて幕外へおびき出してしまつた、と、曲者と見て、官兵たちがどつと叫んで、逸見を取りかこんでしまつた。

『ちえッ残念、この上は斬つて／＼斬りまくるぞ』逸見は猛然としてたけり狂つた、官兵たちははばつた／＼と斬りたほされた、たちまち十五六人の死體がころがつた。

この勢ひに、官兵たちは、あたりかねて、さつと駆けへだ／＼つた、そして、幾挺かの銃口が、さつと逸見に突きつけられた。

『はつ／＼／＼、もうこれまで』

逸見は突つ立つたまゝ、われとわがのどぶえへ大刀のきつさきをづぶりと刺した。やがて、どたりとたほれた。

空には、黒雲が、西へながれてゐた。

哀幕末亂鬪の巷終

大正十四年六月二日印刷
大正十四年六月七日發行



定價 金九十五錢

送料六錢

亂鬪の巷

著者 伊藤鐵世

發行者 中村惣次郎

發行所 中村書店

電話淺草四九三一番
振替東京一一六一六番

印刷者 古屋鉄之助

東京市淺草區福井町二丁目三十七番地

1801
七

三島數樹先生傑作

幕末 秘史 飛劍の舞

四六判板紙表紙
定價金九拾五錢
送料金六錢

王政復古討幕の聲高し…徳川三百年の天下も覆へらんとす…熱血燃ゆる勤王の志士を主人公とし…妖艶なる毒婦、可憐なる菊の井大老井伊、水戸浪士を交へて血泉戀愛を描ける維新の大秘史!!

伊藤鐵世先生傑作

幕末 哀史 亂闘の巷

四六判板紙表紙
定價金九拾五錢
送料金六錢

維新の亂を背景とする京の町亂闘たへず、暗夜に乘じ勤王幕府四條河原に於て、白刃の尖火躍る凄慘限りなき流血の火蓋は開かれんとす!!

538
200

終

